



中山修一著作集16 : ひとつの思想——日本デザインの近代運動

中山, 修一

(Issue Date)

2024-04-24

(Resource Type)

book

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100492138>



中山修一著作集 1 6

ひとつの思想
——日本デザインの近代運動

はじめに——著作集16の公開に際して

ここに公開する著作集16『ひとつの思想——日本デザインの近代運動』は、次のふたつのパートによって構成されています。

第一部 日本の国家による産業美術の振興

第二部 近代日本のデザイン思想

最初の第一部「日本の国家による産業美術の振興」は、私の学問上の父である明石一男先生に捧げる論文です。明石先生は、東京教育大学へ教授としてご着任される前は、通産省の産業工芸試験所に勤務されていました。そこで、わが恩師へ献呈するこの論文は、一九三二（昭和七）年から一九七四（昭和四九）年までの四二年間、工芸指導所から産業工芸試験所へと至る国立のデザイン研究機関によって刊行された『工芸ニュース』を基本資料として、日本の国家による産業美術の振興にかかわって、その歴史を記述する内容となります。

次の第二部「近代日本のデザイン思想」は、木村一男先生への献呈論文です。私は、名古屋に国際デザインセンターが開設されようとしていた当時、木村一男専務理事から、館内に付設される予定のデザイン・ミュージアムの初代ディレクターの委嘱を受け、求めに応じて、その内容と機能につきまして提言を行なった経緯がありました。そのなかで、常設展示の一例として「日本デザインの歴史——幕末・明治から近未来まで」というテーマを挙げさせていただきました。著作集1『デザインの近代史論』の第二部「デザイン史学とミュージアロジーの刷新」のなかの第四章「名古屋の『デザイン・ミュージアム』への提言」の箇所を参照してください。しかしこのときは、提言だけに終わり、実際に作品を収集し、展示に至ることはありませんでした。他方でこの間、私の方は、モリス研究や富本研究に明け暮れ、「日本デザインの歴史——幕末・明治から近未来まで」を主題にした文を書く機会を失っていました。このことは、いまに至るまで未提出の状態で宿題が残っていることを意味します。いまやっと長い年月を経て、自分の目をその主題に向けることができるようになりました。

明石一男先生と木村一男先生の恩義に応えるために、完成には少し時間を要すかもしれませんが、これよりのち、粘り強く筆を進めてゆきたいと思います。そして同時に、その結果として、このふたつの論文が、「日本デザインの近代運動」の一端を明らかにしてくれることを願いたいと思います。

二〇二四年四月二四日

陽春のいま、南阿蘇の森のなかの寓居にて
中山修一

著者について

中山修一（なかやま・しゅういち）

1948年12月、熊本市に生まれる。熊本県立熊本高等学校時代は、新聞部にて部活を楽しむ。東京教育大学農学部林学科に入学、木材工学を専攻する。学生運動の影響でほとんど授業は行なわれず、ヨット部に所属し館山と葉山で年間一〇〇日以上合宿生活を送る。卒業に引き続き、東京教育大学大学院教育学研究科修士課程において美術学（工芸・工業デザイン）を専修する。その後、東京教育大学は移転し筑波大学となる。

1974年4月に神戸大学教育学部の助手に採用される。それ以降、講師、助教授、教授へ昇格。主としてプロダクト・デザインの実技とデザイン史の講義を担当する。組織としての教育学部は、職を得てしばらくしたのち発達科学部に改組され、さらに現在は、国際文化学部との統合により、国際人間科学部へと改称。

在職中、学内にあっては、神戸大学附属図書館副館長を務め、学外にあっては、大阪教育大学教育学部、長崎大学教育学部、国立高岡短期大学（現在の富山大学芸術文化学部）、および静岡文化芸術大学デザイン学部等で、非常勤講師として「デザイン史」の集中講義に長年従事する。また、海外においては、1995年に、ロンドンのウィリアム・モリス協会が本部を置く〈ケルムスコット・ハウス〉にて招待講演を行ない、さらに2010年には、上海の華東理工大学美術・デザイン・メディア学部に招かれて二日間の連続講演を行なう。

他方、1987-88年にブリティッシュ・カウンシル（British Council）のフェローとして、続いて1995-96年に文部省（現在の文部科学省）の長期在外研究員として渡英し、主として王立美術大学（Royal College of Art）とヴィクトリア・アンド・アルバート博物館（Victoria and Albert Museum）を利用して英国デザインの歴史研究に当たる。

1987年から2013年まで英国のデザイン史学会（Design History Society）の会員。2003-14年、ブライトン大学客員教授（Visiting Professor at the University of Brighton）。また、2008年に学術雑誌 *The Journal of Modern Craft*（Berg Publishers, Oxford）が創刊されたおりには、国際諮問委員会（International Advisory Board）の委員を務める。

2013年3月に定年により神戸大学を退職し、それ以降、阿蘇山中の庵に蟄居し、執筆活動に専念する。専門はデザイン史学。

現在、神戸大学名誉教授、博士（学術）。英国にあっては、王立芸術協会（Royal Society of Arts）の終身会員（Life Fellow）、およびウィリアム・モリス協会（William Morris Society）の終身会員（Life Member）。

訳書（共訳を含む）に、ノエル・キャリントン『英国のインダストリアル・デザイン』（晶文社、1983年）、ハワード・ヒバード『ミケランジェロ』（法政大学出版局、1986年）、ステュアート・マクドナルド『美術教育の歴史と哲学』（玉川大学出版部、1990年、鹿島美術財団出版援助図書）、アヴリル・ブレイク編『デザイン論——ミッシェル・ブラックの世界』（法政大学出版局、1992年）、ジャン・マーシュ『ウィリアム・モリスの妻と娘』（晶文社、1993年）、およびポール・グリーンハルジュ編『デザインのモダニズム』（鹿島出版会、1997年）。